

画家中村宏氏作成ノートに残された記録と資料

——東京芸術柱展、観光芸術研究所を中心に——

橋川 英 規

はじめに

- 一、中村宏氏の一九六〇年代
- 二、中村宏氏作成ノートについて
- 三、東京芸術柱展について
- 四、観光芸術研究所について

はじめに

東京文化財研究所企画情報部では、画家中村宏氏（一九三二～）が一九六〇年代に使用したノートを所蔵している。このノートは、中村氏が一九六五年から一九六八年ころまで前衛美術会の事務的業務を遂行する上で使用したもので、同会の運営に関する記録と資料が残されている。同会の定例会議の議事録や当時の定期展覧会の告知が、チラシ、会場写真などが収められ、またそれらとは別に、ノートの冒頭に観光芸術研究所の第一回展である「観光芸術多摩川展」のドローイングが挟み込まれている。本稿は、資料紹介として、この一冊のノートの全体像を示し、またこのノートに収められた「東京芸術柱展」関連記録と資料、「観光芸術多摩川展」関連資料を詳述する。

一、中村宏氏の一九六〇年代

静岡県浜松市で生まれた中村は、一九五一年に上京し、日本大学芸術学部在籍中に、若い作家たちの美術運動に参加し、一九五三年から本格的に絵画制作に取り

組み始めた。中村にとっての一九六〇年代は、作品制作においては、社会的事件を取材しモチーフとした「ルポルタージュ絵画」の時代が終わり、「場所の兆（一）」（一九六一年、浜松市美術館）、パシフィック（同年、栃木県立美術館）などの作品を転換点として、「モンタージュ絵画」「観念絵画」を展開していく時期にあたる。またバルトルト・ブレヒト『亡命者の対話』（一九六三年、現代思潮社）などの仕事を多く手掛け、一方、後述する「東京芸術柱展」を主催する前衛美術会においては、山下菊二、桂川寛ら一世代前の作家が退き、中村らが同会の中心となっていく時期である。

二、中村宏氏作成ノートについて

最初にこのノートの形態、移動、内容を以下に挙げる。

形態

B5判、九八頁。貼り込み資料、挟み込み資料多数（縦二五〇・〇cm×横一九八・〇cm×厚x三三mm）製品名、番号：「NOTE BOOK—SPECIAL MADE—」[S.K.] [SB50]（挿図1）

移動

中村氏から一九九一年頃に笹木繁男氏に渡り、笹木氏から東京文化財研究所に寄贈された。

内容（抜粋）（上から内容、頁数）

- ・ 観光芸術多摩川展パノラマ図（一九六四年） 見返（挟込）
- ・ 東京芸術柱展写真・印刷物（一九六五年） 二～九頁
- ・ 前衛美術会事務局記録（総会、委員会、会計記録） 一〇～一三頁
- ・ 東京芸術柱展関連記事、昭和四〇年度展覧会調査表下書き 一四～一六頁
- ・ 前衛美術会事務局記録（総会・委員会議事録、翌年展示プラン、綱領検討メモ） 一七～二二頁
- ・ 東京芸術会議展（一九六六年）関連記録・印刷物（会合メモ、出品目録請求者、会計記録） 二二～二八頁

・前衛美術会事務局記録（総会議事録、会計記録、会員からの書簡） 二八～三〇頁
 ・東京芸術会議会場写真 三四頁
 ・第二一回前衛美術展関連資料・記録（一九六七年）（印刷物、議事録） 三五～四〇頁

・「芸術と革命研究会」関連資料（一九六八年、第六、七、八回） 四一～四五頁
 ・（未使用） 四六～六二頁

・第二二回前衛美術展出品者目録（一九六七年）、第二二回前衛美術展印刷物（一九六七年）、第二声明草案、前衛美術会封書（一九六八年度会務報告、会員名簿）、「第六回芸術と革命研究会」告知はがき（一九六八年）、前衛展「集団個展」区画決定図（一九六八年） 六三頁（挟込）
 ・（未使用） 六四～八六頁

・前衛美術会々々則 九〇～九二頁
 ・（未使用） 九二～九三頁

・前衛美術会名簿（四種。一九六七年、手書き年月不詳、一九六三年、一九六六年） 九四～九七頁

・都美術館改築問題に対する前衛美術会の第二声明案、一九六七年前衛美術会および前衛展報告、研究会関連資料綴（「芸術美術シンポジウム」（一九六二～六三年）関連資料） 裏見返（挟込）

ほかに、岡山アンデパンダン展告知（四四頁、永岡博書簡、一九六八年六月一〇日付）、中村宏宛近藤文雄書簡（八七頁）、中村宏宛頭川政治書簡（八七頁）、前衛美術会ニュース（八八～八九頁、一九六五年）などが収録されている。

二、東京芸術柱展について

次に、ノートに収録された記録と資料として、東京芸術柱展の資料を詳述する。東京芸術柱展の概要は以下の通りである。

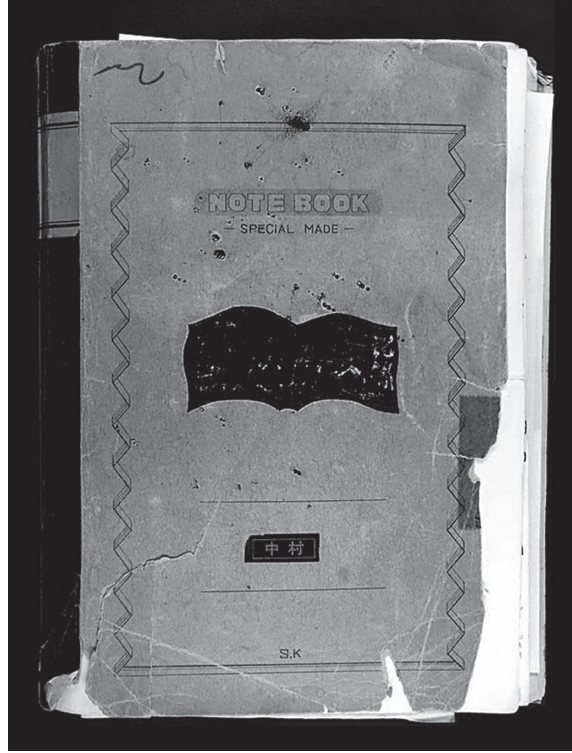
展覧会名	東京芸術柱展
会場・会期	東京都美術館 彫塑室、一九六五年七月二日～一〇日
主催	東京芸術柱委員会・前衛美術会
形式	アンデパンダン制。展示の方法は後述。
出品者（点数）	六一名（二二点）
入場者数	四〇三名 ⁽¹⁾

東京芸術柱展関連資料には以下のものがある。

①「東京芸術柱」招待状

はがき（一〇cm×一四・八cm）、一枚（挿図2）。展覧会の趣旨、会期、会場、連絡先が記されている。展覧会の趣旨は以下のとおり。連絡先は中村の自宅。

美術作品は、どのようなかたちをとろうと作り手から送り出される時は、いつこのタブロオです。展覧会はこれまでどのような場合でもこれらいつこいつこのタブロオたちの無自覚なら列でしかありませんでした。



挿図1 中村宏氏作成ノート



挿図2 東京芸術柱展 招待状ほか

わたしたちは、ここに着目し自覚的な展覧会に代えてゆくために展覧会の形式だけを逆説的に利用し、一本の柱にタブロオたちを集合させ柱そのものを巨大なタブロオと見なすことによって展覧会「タブロオ↓柱と考えることにしました。

この柱を名付けて「芸術柱」と呼びます。一点のタブロオから集合のタブロオ、芸術柱へ」と云うわけです。

誠に興味ある企てを御観賞下さい。

- ②東京芸術柱・展 参加規定
 四五・二cm×二七・二cm、一枚。前記の招待状にも記された趣旨のあとに、参加規定が記されている。

参加作品は新作とも限らず、新旧を含めてタブロー参加の意義を有します。いわゆる共同制作ではなく、まして今までのような一枚一枚のタブローの開帳でもなく、といって、安易なタブロー否定でもない、まったく新しい展覧会となるでしょう。

この文章とともに、芸術柱の構造(横四m、縦四m、高さ八m)の図があり、出品料(一五〇〇円、原則一人三mを割り当て)、出品するうえでの注意事項(芸術柱の壁に取り付けられるのであれば、立体作品も受け付けるなど)が記されている。

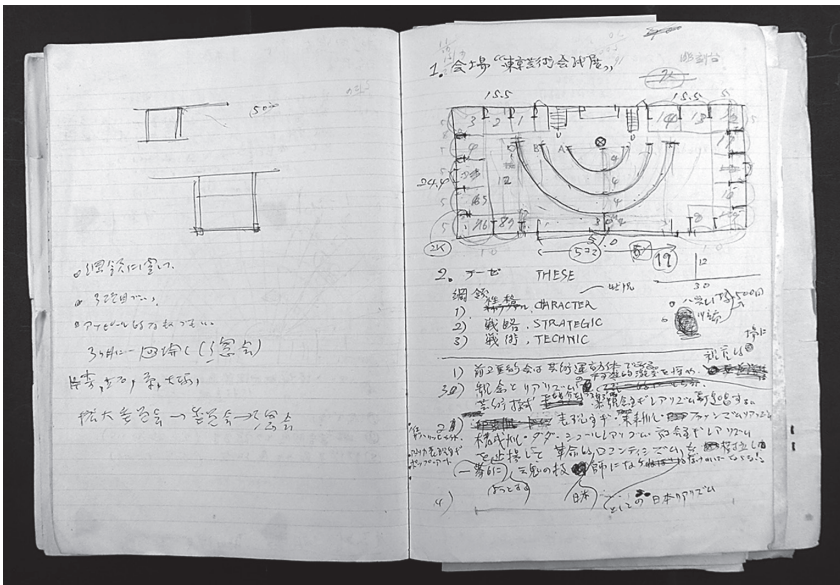
- ③参加者名簿」
 三一・一×一八・六cm、一枚。参加者名簿には、井手則雄、入江比呂、植竹邦良、立石紘一(後のタイガー立石)、鈴木慶則、小池一誠、奥田善己、松沢宥らの名前が見られる。この名簿の出品者番号39以降の部分は、後で貼り付けたようなかたちとなっている。

- ④会場写真
 手札サイズ(七・五cm×一一・〇cm)、二枚。この展覧会はいくつかのメディアで取り上げられている⁽²⁾。ただ、会場の様子を伝える記事は少なく、このノートに収められているカラー写真は、この展覧会を知る上での格好の資料である。

- ⑤記録
 先に述べたような印刷物や写真のほかに、前衛美術会の会議記録が、中村の手書きにより残されている。

前衛美術会総会（一九六五年七月四日）ノート一〇頁

東京芸術柱展の開催に合わせて行われた前衛美術会の総会の記録で、出席者は太田昇、宮城泰介、晴山英、岡美行、山下宏、近藤文雄、山下菊二、山田宏修、中村宏、斉藤晃司、井手則雄の十一名、オブザーバーとして織田達朗、立石紘一、市毛富美子、池田龍雄の四名、このほかの「委任状」として大塚睦、入江比呂、前田杜土、中山正、町田光子、小粥智夫、長尾祥子の七名。総会では一般報告、会計報告が行われ、委員会改選、桂川寛退会が承認され、立石紘一や奥田善己らが会員推薦されている。また次の年（一九六六年）の定期展に対する意見も募り、その名称、展覧会形式として「東京芸術物体展 立体に統一する」「集団個展 コマ割りにして個



挿図3 前衛美術会総会記録

アート・アーカイヴの諸相

人にかし出す」「芸術箱」「芸術博覧会」「芸術公園」「芸術庭」などと記され、そのアイデアが窺える。

第一回委員会（同年八月三〇日）ノート一頁

出席者は岡美行、山下宏、小粥智夫、中村宏の四名。ここでは、次の年の展覧会名称を「東京芸術会議展（仮）」として、その計画について、展示会場構成、作品展示方法、広報についてなど、前回の総会の議論を踏まえて、より具体的に議論された様子が手書きの図も用いて記されている。

第一回総会議事録のあとのメモ ノート一七頁～二〇頁

また先日のように、前衛美術会の中心メンバーの異動に象徴される、同会の変質をあらわす記録を紹介する。この記録は記載日が記されていないが、これが第一回総会（一九六五年九月二五日）と委員会（同年二月一八日）の間にあり、この期間に中村により書かれたと推察される。前衛美術会の綱領の見直しを行っている（挿図3）。

これらのほかに、中村宏氏作成ノートの東京芸術柱展関連資料は以下のものがあ

る。⁽³⁾ 東京芸術柱展参加証（六・〇cm×九・〇cm）二枚（うち一枚は中村宏署名入）

東京芸術柱展入場券（六・〇cm×一八・一cm）二枚

織田達朗「東京芸術柱とは何か」『日本読書新聞』一九六五年七月二六日付、二点（うち一件切抜）

二、観光芸術研究所について

観光芸術研究所は、一九六四年に中村と立石紘一により結成され、一九六六年まで二年あまり活動したグループで、同時期の反芸術活動が絵画・彫刻といった従来の美術の形式に反抗する表現を行っていたのに対し、あえて絵画という平面による表現活動にこだわり、「見る」という視覚的「表現」を追求した活動であった。展覧会開催、街頭パフォーマンス敢行、テレビ出演など多彩な活動を行っている。

観光芸術多摩川展パノラマ図⁽⁴⁾

三六・四 cm × 二五・七 cm (一八・二 cm × 二五・七、二枚)。観光芸術多摩川展は、同グループの第一回展として、日野駅に近い多摩川河川敷での野外展である。このパノラマ図は、野外展の後、中村と立石が記憶を元に共同作成されたものである。このイベントを題材とした映像作品「Das Kapital」を、中村が作成しているが、ここに写された会場の様子と照合しても相違が見当たらず、正確な情報が記載されていると思われる。また「Das Kapital」ではわからないこと、たとえば、立石制作の富士山のカキワリの大きさや素材など設置されたオブジェの個々の情報、このイベントの会場構成、来場者などを知ることができる資料である。

このほかに、中村宏氏作成ノートの観光芸術研究所関連資料は以下のものがある。
中村宏宛立石紘一書簡(一九六六年六月三〇日付前衛美術会退会届、消印は七月一日、一〇・〇 cm × 一四・八 cm)

以上が、本稿で紹介する、東京芸術柱展、観光芸術研究所に関する資料である。ノートには、この資料のほかにも前衛美術会主催研究会「芸術と革命の研究会」、前衛美術会の定期展(東京芸術会議展、集団個展など)、前衛美術会の後身「齧展」の萌芽となる動向、あるいは同会に関連した人物周辺のできごとを検証する研究資料として活用されることを望んでいる。

註

- (1) 「入場者数 四〇三名」は、「7月の展覧会開催状況」(『東京都美術館』美術館ニュース』第一七五号、一九六五年八月、七頁)に拠る。本稿で紹介したノートには、東京都美術館への報告書提出のための下書きと思われる記録があり、そこには「入場者 三四七名」とある。
- (2) この展覧会を紹介した記事は、織田達朗「東京芸術柱展とは何か」(『日本読書新聞』一九六五年七月二六日、第八面)、中村宏「タブプロオで作った柱 東京芸術柱展」(『美術手帖』第二五九号、一九六五年九月、六四頁、手帖通信 絵画)、織田達朗「もうひとつの〈民俗〉その3 東京芸術柱展」(『美術ジャーナル』第五五号、一九六

五年九月、一八〜二二頁)がある。

- (3) 第四三回齧展(二〇一四年八月二一日〜三一日、東京都美術館)の会場に歴史史料コーナーが設けられ、「借設計事務所による芸術柱図面」、「東京芸術柱展ポスター」が展示された。また中村宏、星野勝成、森川宗則「齧展考」鼎談と資料集(編集・通底プロ、二〇一四年八月)には、芸術柱図面が収録された。

(4) 「観光芸術多摩川展パノラマ図」は、「多摩川で多摩川から、アートする」展カタログ(府中市美術館、二〇〇九年九月)の目次ページに収録され、その存在は知られている。

(きっかわひでき・企画情報部アソシエイトフェロー)